

公益財団法人 小佐野記念財団

第30回 国際交流・国際理解のための  
小中学生による作文コンクール



受賞作品集

## <小学生の部>

最優秀「アメリカからお姉ちゃんが二人やって来た」	1
甲府市舞鶴小学校 4年	望月 心晴
優 秀「私が海外体験を通して思ったこと」	3
笛吹市立春日居小学校 5年	コペッチ 花
優 秀「わたしの海外りょこう」	5
山梨大学教育学部附属小学校 2年	大木 昂

## <中学生の部>

最優秀「第一歩」	6
北杜市立甲陵中学校 2年	月岡 華林
優 秀「豊かさって何だろう」	8
山梨大学教育学部附属中学校 3年	今泉 楓
優 秀「人と人とのつながり」	9
甲府市立南西中学校 3年	中原 那都
優 秀「私の国際交流」	11
北杜市立甲陵中学校 1年	小名木 みなみ
優 秀「興味」	13
北杜市立甲陵中学校 2年	吉田 瑠夏
佳 作「協力するためには」	15
甲府市立南西中学校 3年	三藤 愛斗
佳 作「国際交流の提案」	17
甲府市立南西中学校 3年	田中 和実
佳 作「味わい、体験し、分かち合う国際交流」	19
北杜市立甲陵中学校 1年	池田 康将
佳 作「違いから生まれる偏見」	21
北杜市立甲陵中学校 3年	尾崎 永奈
佳 作「ずっと続く国際交流」	23
北杜市立甲陵中学校 3年	中川 立土
佳 作「将棋から始まる国際交流」	25
甲府市立北東中学校 3年	堀内 晶貴

## <小学生の部>

### 最 優 秀

「アメリカからお姉ちゃんが二人やって来た」

甲府市舞鶴小学校4年 望月 心晴

今年の6月に、わたしの家に、アメリカの女の子が、2人やって来ました。なぜかというと、わたしの家でホストファミリーを受け入れたからです。1週間一緒に過ごす事になりました。アメリカから来た女の子の一人の名前は「アンナ」です。アンナは、白人です。もう一人は「カイヤ」です。カイヤは、黒人です。二人をおかえた時、最初は日本語が通じなくて、何をしゃべっているのかわからず、ドキドキしました。お父さんや、お兄ちゃんやお姉ちゃんが、家の中を案内したり、自己紹介をしました。夜おそかったので1日目はそれで終わりました。2日目の朝、「グッドモーニング」でスタートしました。初めての朝ごはんは、日本にきたから和食を食べさせてあげたいとお母さんとおばあちゃんがごはんとおみそすると目玉焼きとソーセージを作ってくれました。食べられないとかわいそうなので、コーンフレークやパンも用意しておきました。わたしは二人が、ごはんを食べられるか心配でした。アメリカでは、はしを使わないので、フォークとスプーンも用意しておきました。

「これは、はしだよ。」

と英語で言い、わたしであげました。食べ始めてしばらくしてから、はしを使おうとしていました。なので、わたしがはしを使う所を見せました。すると、わたしのマネをして使っていました。二人とも、運んでいると中に落してしまったり、つかめなかったり、なかなか口に入りませんでした。2日目はリニア館や河口湖に行きました。お友達も来て大ぜい行きました。みんなで一生けん命英語を話しました。初めは、しずかだった車の中もいっしょにいるうちに、にぎやかになりました。わたしは英語がわからないので、みぶり手ぶりやスマホやタブレットのアプリで会話をしました。夜は、お母さんがタコライスを作ってくれました。これは、「おいしい」と日本語で言って、おかわりもしました。3日目は、お兄ちゃんのお友達も来て、風穴に行き、帰りはボーリングをしました。二人とも上手でわたしは負けてしまいました。その後、一緒にプリクラをとりました。すごくよろこんでいました。そして、「ラーメン」を食べに行きました。「おいしい」と言って食べていました。4日目からは、とっつなれ、英語と日本語とけいたいのアプリでいろいろな事を話しました。二人がすんで

いるアイオワの事も教えてもらいました。アメリカのお友だちの写真も見せてもらいました。一緒にトランプをしたり、おもちゃのゲームで遊んだりしました。あっという間に最後の夜になってしまいました。この日は、アンナのたん生日がちかいのでたん生日パーティーと、おわかれパーティーをしました。日本で一緒に遊んだ思い出を全部アルバムして、手紙を家族みんなで書いて、二人にプレゼントしました。二人とも

「センキュ」

となん回も言って、ずっとアルバムを見ていました。わたしは二人が本当に帰ってしまうのが、悲しくて泣いてしまいました。そしたらアンナがギュッとだきしめてくれました。アンナも泣いていました。そして、一緒に遊んだ手あそびや、「アルプス一万尺」をしました。その日はいっぱい泣いたのでつかれて、すぐ寝てしまいました。そして次の日は、二人との本当におわかれの日。ついに二人が乗るバスが来て、

「また、ぜったい会おうね。」

とやくそくしました。とってもとって悲しくて、バスが発したらお姉ちゃんと追いかけて走りました。とても楽しかった1週間でしたが大へんな事もありました。それは食べ物もちがいです。お米は少し食べられましたが、おすし屋さんでのすめしは食べられませんでした。反対におみやげにもらったアメリカのグミは、いつも食べているグミと味がちがい、食べられませんでした。日本とアメリカでは言葉だけでなく、食べ物や使う物がまったくちがうという事がわかりました。言葉も食べ物もちがうけれど、仲良くなれる事もわかりました。アメリカにも友だちが出来た事が、とってもうれしいです。二人はアメリカに帰ってしまったけれど、今もメールでお話しています。

またいつか、会える日を、ずっと、待っています。早く会いたいな。

優 秀

「私が海外体験を通して思ったこと」

笛吹市立春日居小学校5年 コペッチ 花

私は今年の4月に1カ月間ニュージーランドのピクトンという町に行ってきました。私は海外に何度も行ったことがあります、今回は一人で飛行機に乗って行きました。

飛行機から降りた時、空はまっ青で雲は一つもなく、高い山が多かったです。空気はきれいで、気持ち良かったです。初めて一人で飛行機に乗ってとてもドキドキしたけど、ニュージーランドについてた時はホームステイをするのは初めてだったので楽しみでワクワクしました。親がいなかったから少し心細かったけど飛行機の中やのり変えの時にたくさんの人に助けてもらってありがたい気持ちになりました。

ニュージーランドではピクトン小学校に通いました。そこでは、日本の文化を教えたり、マウイ語を学んだり楽しいことをたくさんしました。一番うれしかった事は、はしをみんなにあげて使い方を教えたら、次の日の昼ごはんの時、みんなはしを使っていたことです。とてもうれしかったです。みんな、上手に使っていて、びっくりしました。

外国に行って気づいた日本のよさがあります。それは、平和で安全だということです。学校に歩いてとう校できるなんてとても安全だねと言われました。

どこの国の人もやさしくて、明るいなと思いました。私はニュージーランドの学校で初めての日みんな何をすればいいのかを教えてくれたり、分からなかったところを教えてくれたりしました。休み時間では、学年かかわらず仲良く遊んでいて、すごいなと思いました。

私は、「小学生の宿題の成績向上に効果なし」と書かれた新聞を見つけました。それには、米国デューク大学のハリス・クーパー教授の「小学生の宿題はほとんど効果がない。むしろ悪いえいきょうをあたえる」という研究成果が書かれていました。クーパー教授は、宿題よりも子供が「楽しい」と思う時間をふやすことの方が成績向上につながるとし、「小学生の宿題は禁止に値する」と述べていて私は納得しました。ニュージーランドでは月曜日に宿題を出されて金曜日までに自分のペースで終わらせて出すという約束でした。その方が遊ぶ時間がふえてつかれないと思います。1日目に全部宿題を終わらせて残りの4日が

遊べると考えると、やる気が出てきました。

私は今までに、オーストラリアとアメリカとカナダとニュージーランドに行ったことがあります。日本とちがうと思うことは、野生動物や人と自然が仲良く生きているなど思うことです。例えば、カナダでは庭に野生のシカが入ってきたりします。

日本人はやさしいといろいろな国から言われました。そんなやさしい日本人と自然や動物といっしょに生きていけるよう、よびかけたいです。日本だと野生の動物が山から下りてくるとあわててその動物をつかまえて殺してしまいます。でも、外国だと、一しょに生きています。だから、私が海外で学んだ事をみんなにつたえていきたいです。私はいつか日本も自然と仲良くくらせるといいなと思います。

「わたしの海外りょこう」

山梨大学教育学部附属小学校2年 大木 昂

わたしは、春休みにグアムへ行きました。ひこうきにはじめてのりました。のって、ひこうきが出っぱつして、とび立つ時に、おもわず「キャー」といってしまいました。雲の上まできて、まどをのぞくと日本が丸く見えました。

グアムにつくといろいろな国の人がたくさんいました。海であそんでいました。グアムの海の色はエメラルドグリーン色でした。わたしは思いました。「エメラルド色の海でいてほしいな。だから、みんなにごみや、いろいろなものを海にすてないようにしてもらいたいな。」わたしは、きたない海をそうぞうするとかなくなります。

グアムのほとんどの人がかんこうのしごとをしています。そこで海がきたなくなってしまうと、かんこうきゃくが、へってしまいます。そうなるとかんこうのしごとをしている人が、はたらけなくなってしまうと、たいへんです。

わたしたちも協力して、ごみを海にすてたりしないようにしたいです。海の中には、たくさんさかなや、ナマコもいました。ひかりがあたって水めんがキラキラしていました。日本の海にはいないカラフルなさかなたちがたくさんいました。海はとおあさでした。

せかいじゅうの人たちで、きょうかして、海がきたなくならないようにしたいです。

## <中学生の部>

---

### 最 優 秀

#### 「第一歩」

北杜市立甲陵中学校 2年 月岡 華林

将来、私は国際関係の仕事に就きたい。だから、外国人が日本語を学ぶクラスへ2日間職場体験として行き、外国人との関わり方・交流の仕方を学んだ。

そこには、本当に様々な世界中の国の方がいた。中国人、アメリカ人を始めとし、韓国人、インド人、ベトナム人、カナダ人、フランス人、オランダ人、クロアチア人、フィンランド人、ウズベキスタン人、ザンビア人などなど、世界の大陸をぎゅっと1つにしたかのような異空間に居るようだった。それこそみんな、肌の色、顔の形から髪形やメイクの仕方、ファッションなど、何から何まで違っていて、独特で個性的だった。

しかし、どこの国の方も、私に習った日本語を使って積極的に話そうとしてくれた。私はそれに心を打たれた。小学校と中学校で英語を学び始めてから3年余り。だが、私には外国人のような積極性もなければ、度胸もなかったから、外国人に知っている英語の単語すら話すことができず、そこで『第一歩』を踏み出すことができなかつた。とても情け無かつた。一方で外国人は、まだ日本語を習って4ヶ月しか経っていないのにも関わらず、先生に聞いたり、携帯電話で検索したり、ということをしてまでも、私に「日本語」で伝えようとしてくれた。本当に、素直に心から嬉しかった。それと同時に、まず、心持ちは違う、そう思った。だから、私も外国人を見習ってまず使うという『第一歩』を踏み出さなければいけないと思った。ホームステイに行く時や東京オリンピック。そこまでの遠く、大きなところではなくとも、まずは、自分の住んでいる町や、観光へ行った場所などの身近な場所で『第一歩』を踏み出したい。

今回、その『第一歩』を踏み出す時に大切なことが分かった。それは、誰をも平等に見るということだ。それをするために国民性を少しでも知ることが大切だと思う。ここの国の人だから、あそこはあだから、という風に見てはいけないということだ。前にも書いた外国人が積極的なのも国民性が関係する。例えば、何かを断るとき、日本人は「うーんと、そうですね・・・」などといった回りくどい遠回しな言い方をする。一方でアメリカ人は、「ノー」のたっ

た一言で解決する事もあるだろう。これは、決定的な国民性の違いだと言えるだろう。だからと言って、それが良い訳でもなく、悪い訳でもない。産まれた土地、その他の環境は違うのだから、考え方が同じとは限らないし、違うとも限らない。違うのが当たり前、と受け入れるのが良いのではないだろうか。さて、国民性と言っても、国民の性格に限らない。その国の歴史や土地の環境によって、国民に共通して見られる気質のことを言う。だから、宗教や言葉も国民性の一つとして良いだろう。日本は、憲法で信教の自由が認められており、国教はない。一方で、キリスト教、イスラム教、その他の宗教が国教となっている国がある。キリスト教徒はお祈りをしたり、イスラム教徒は口にしてはいけない食材があったりする。それらを私たちが理解しなければ、日本で観光する事が大変困難となってしまいうだろう。嫌な思いをさせないためにも国民性の理解は必要だ。自分が把握しきれない事があればたずねたり、なんでも言って下さい、と声をかけるのも『第一歩』となるだろう。日本語は一語一語がはっきりしている。英語には日本語にはない、子音を続けて発音するものがある。日本語にない英語の発音を日本人がするのは難しい。それと同じように「h」を普段発音しないフランス人が日本語を発音するのは難しいそうだ。私の名前「かれん」と言うのにも「がれん」に聞こえて、一度言い直したら、クラスの先生が「フランス人は「h」を発音しないから」とおっしゃった。そこで初めて自国語の発音の特徴を知った。

これらは、私が職場体験の1日目、活動や先生へ質問をして感じたことだ。2日目からは、1日目よりも意識して行動できた。外国人が分からなかった所を知っている範囲の英語で置き換えて説明したり、ヒジャブを巻いている女性はイスラム教徒と理解できたり、フランス人を始めとする「h」を発音しない国の方の日本語を理解して意識するようになりした。そうしたら、1日目より更に楽しい時間を過ごすことができた。毎日行って外国人と交流したい！と心の底から思った。今回の体験を通して、私に合った、人の役に立ちながらも楽しめる、そんな天職に就きたいという意思がより強くなった。どんな仕事があるのかを探し、それを目指して勉強に励みたい。

## 「豊かさって何だろう」

山梨大学教育学部附属中学校3年 今泉 楓

私は一昨年、カンボジアのスタディツアーに参加しました。行く前は、「カンボジアって何もなさそうだな」と思っていました。でも、実際にカンボジアへ行き現地の人と話してみると、自分のイメージが間違っていたことに気がつきました。カンボジアにも日本と同じ様に、ショッピングモールや外食産業の店舗がありました。また、日本ではなかなか見られない屋台がたくさんありました。そして、何よりも、カンボジアには「物」では測れない豊かさがありました。

日本人はたくさんの「物」を持っていますし、日本の都市には高層ビルが立ち並んでいます。これが「豊か」ということだと、以前の私は思っていました。しかし、カンボジアで過ごすうちに、私は疑問を持ち始めました。カンボジアは、日本と比べると経済的には貧しい。なのに、そこで暮らしている人達が、日本人達よりもいきいきとしている気がするのは何故なのだろうか？そう、私が出会ったカンボジアの人は皆、いつも笑顔で楽しそうだったのです。さらに、カンボジアで過ごしている時に現地の人が出た、

「カンボジアには、自殺はないんだよ。」

という言葉に、私は大きな衝撃を受けました。自殺してしまう人がたくさんいて、皆いつも急いでいる。そんな日本は本当に「豊か」といえるのだろうか？「豊かさ」って何なんだろう？

私はたくさんの好きな「物」を持っていますし、発展している都市も好きです。でも、いつでも、誰に対しても笑顔で接し、「いろいろあるさ」と人生に余裕を持って生きているカンボジアも、とても豊かですてきだと思いました。どちらが良いとは言えないけれど、日本で思っている「豊かさ」がすべてではないことを知りました。そして、現在の日本やカンボジア、世界中の国の状況をもっと知るために、現地へ行って見て感じてきたいと強く思いました。

カンボジアへ行ったことは、これから先の日本やカンボジアや世界はどうなっていくべきなのか、その中で自分に出来ることは何なのかを考えるきっかけとなりました。これから、もっと多くの場所へ行き、たくさんの人と出会い、「豊かさ」や「幸せ」とは何なのか、自分なりの答えを見つけだしていきます。

優 秀

「人と人とのつながり」

甲府市立南西中学校3年 中原 那都

平成29年8月2日、私は「甲府市姉妹都市友好教育研修派遣団」の一員として、甲府の姉妹都市、デモインへと旅立った。デモイン空港についたとき、私たちのホストファミリーが「Welcome」という紙を持って迎えてくれた。

翌日から、地元の子たちと一緒に授業をしたり、デモイン市内の学校をまわった。アメリカでは、黄色いスクールバスで移動する。日本ではあまりスクールバス自体多くはないが、とても便利で良いと思った。バスの中では、色々なことを話した。気に入っているアーティストについて、SNSについて、お互いの言語についてなどだ。私は英語が好きだが、学校以外ではほとんど習っていなかったため、恐らく文脈に不備も多かったと思う。しかし、みんな理解しようとしてくれていて、とても嬉しかった。そのうち、話すのに必要なのは完璧な英語ではなく、気持ちなのだとわかった。話した子の中には、日本語にとっても興味をもつ女の子もいた。私たちが英語に興味をもつと同じように、アメリカにも日本語をもっと知りたいという女の子がいることに喜びを覚えた。現在、その子とは日本語と英語の両方をつかい、SNS上で会話している。お互い練習するためだ。彼女は、初対面の時から積極的に話しかけてくれた。私は、アメリカ人に対して彼女と同じような印象を持っている。例えば、スーパーのレジだ。お会計をしている際、あいさつから始まり話が広がる。自分でも、自然と受け応えしていることに驚いた。日本で、会計の際に会話が聞こえるなんてことがあるだろうか。アメリカのスーパーではそんなことが普通である。もう1つ例を挙げると、私たちにトラブルが起きたときのことだ。私ともう1人の子に悩みがあり、相談したとき、エイミーというデモイン側の担当の先生が丁寧に対応してくれた。そのときが初めて話したときであったのにも関わらず、彼女は私たちに本当によくしてくれた。彼女だけでなく、周りの人みんなが、私たち二人のためだけに動いてくれた。悩みをためて出ていた涙が、変わった。「安心して、もう泣かないで」と彼女は言った。ちがう。「これは、嬉しくて出ているんだ」私はそう伝えた。あの後、目がはれて恥ずかしかったのを

覚えている。私は彼女に、どうしてここまで私たちに良くしてくれるのかと尋ねた。彼女は、あなたたちを娘のように思うからよ、といった。更に涙が止まらなかった。アメリカには、こんなにいい人たちがたくさんいることがわかった。英語を通して、人の温かさを感じる事ができた。

私は、この研修で本当に多くのことを学ぶことができた。アメリカの日常生活と文化について学ぶことを中心に、それらの細かなところも身につけられたと思う。英語力も向上し、興味が更に沸いたのも事実だ。だが、それ以上に人との関わりを深く知り、人間的に成長できたと思う。私はこれから、今回の経験を糧に、更に国際交流を図っていきたい。

## 「私の国際交流」

北杜市立甲陵中学校 1年 小名木 みなみ

今年の夏、ホストファミリーとしてアメリカの女の子を受け入れました。私の住んでいる韮崎市では、アメリカのフェアフィールド市と姉妹都市であり、毎年高校生が韮崎市を訪れたり、逆に韮崎市の学生がフェアフィールド市に行ったりし、交流する事業を行っています。以前からこの事業に興味を持っていた私は、初めて受け入れをすることを決めました。

来る前から何をしてあげようかなとワクワクする一方、英語が得意ではなく、上手くコミュニケーションがとれるか不安でした。しかし、その点は全く心配ありませんでした。短い単語を並べるだけでもかなり伝わりました。また、身振り手振りをつけたり、絵や文字で表現するなど、工夫してコミュニケーションをとることで、すぐに仲良くなることができました。

約3週間共に生活をし、日本の文化を知ってもらおうと色々な場所に出かけました。自分が率先して教えてあげたいと思っていたけれど、それ以上に彼女から学んだことのほうが、はるかに多かったです。私は彼女の滞在中、良いところを沢山見つけました。一番は日本が大好きで日本をもっと知りたいと思って来てくれたことです。だから、どこへ出かけても喜んでくれました。また、年下の私に対し、本当の妹のように接し、仲良くしてくれました。彼女の持ち前の明るさで私の不安や心配を吹き飛ばしてくれて、本当に感謝しています。

私は、住む場所が違っても、関わり合うことで気持ちが通じ合えるというのはとても素晴らしいことなのだと感じました。言葉が通じない外国人と話すことは容易なことではありません。しかし、笑顔で相手のことを理解しようとすることで本当に仲良くなれるということを経験できました。もちろん、相手のことを100パーセント理解するのは難しいことですが、どのように過ごしているのかな、どのような文化があるのかな、と少し考えるだけでも良いと思います。そして、互いを認め合うことができるのです。

どうしても人は、自分と違う人に対して偏見を抱いてしまいます。特に日本は島国で、同じ人種の人が住んでいるので、異なったものを受け入れるのが苦手なのではないかと思います。でも、それでは様々な人が共に生きることが難

しくなってしまいます。私は、様々な人が共に生きる良さというのは、互いのことを尊重し合うことで、優しさが持てる社会のことだと思っています。なぜなら、彼女が今回の受け入れで、日本のことや、私たち日本人のことを理解しようとしてくれる姿勢が、本当に嬉しかったからです。

私は今回、受け入れをして、彼女だけでなく沢山のひととふれ合って、多くのことを学ぶことができました。最後に別れる時、「本当に楽しかった。ありがとう。」と言ってもらい涙がとまりませんでした。日本という異国の地での3週間、慣れないことも多く大変だったと思いますが、この言葉を聞いて国を超えてきずなが深まったような気がしました。そして、「絶対にまた会おうね。」と約束しました。次は私が彼女に会いに行こうと思っています。再会できる日を楽しみに、英語の勉強に今まで以上に積極的に取り組んでいます。私の将来の夢は、国際関係の仕事につくことです。小さいときから書道を習っていたり、中学生になって弓道を始めたりするなかで、日本の文化をもっと沢山のひとに知ってもらいたいと思うようになりました。また、外国のニュースなどにも興味をもって生活していきたいです。今回の受け入れで、国際関係の仕事につくという夢を叶えたいと思う気持ちが、さらに大きくなりました。この夏、自分の夢に一歩近づくための貴重な体験ができました。沢山のひとと交流することで優しい気持ちを持てることを教えてくれた彼女には、感謝の気持ちでいっぱいです。蕪崎市とフェアフィールド市の交流がずっと長く続くことを願っています。そして、これからも機会があれば、私なりの国際交流をしていきたいです。

## 「興味」

北杜市立甲陵中学校2年 吉田 瑠夏

私は、小学4年生から、オンライン英会話のレッスンを受けていた。最初のレッスンの時は、ビデオを通してだけでも、外国人と英語で話さなくてはいけないので、とっても緊張していた。はじめた頃は、先生の言っていることが理解できなかったり、自分が伝えたいことがうまく英語で言えずあまり楽しくなかった。でも、何回もレッスンを重ねるうちに、少しずつ会話をする手段を身につけた。完璧に先生の話聞き取ろうとしなくても、重要な所だけわかればいいことに気付いた。正しい英語できっちり話そうとして黙り込むより、単語を連ねて手振り身振りで伝えようとするほうが大切だということも学んだ。レッスンの初めにする挨拶がわりの会話もHelloと喋るとぎれてしまうのが、だんだん続けられるようになって、そのうち自分から質問できるようになった。単語をただ並べるだけだけれど、一歩踏み出してコミュニケーションができるようになったことで、先生や先生の国であるフィリピンに興味が出てきた。レッスンの中で、生活習慣や考え方などの話を聞いたり、また日本のことも発信するのが1つの楽しみになっていった。例えば、夏休みの話をした時、宿題が大変と言うと、宿題があるの？夏休みは休むためじゃないの？と驚かれた。ある時は「君の名は。」や「ナルト」など、日本のアニメやマンガの話で盛り上がりもした。日本のポップカルチャーが、深く浸透していることがわかった。フィリピンについて書かれた本などではわからないような、日常の話を聞くたびにワクワクしたし、先生ともフィリピンともつながりを感じるようになった。

しかし私が6年生の時、長くお世話になった先生がやめて、東京で仕事をするため日本に来ることになった。最後のレッスンの時、先生が連絡を取り合おうねと言って、ラインのIDをくれた。私は、毎年夏休みに東京の祖父母を訪ねる。その時を利用して、先生に会いに行くことにした。早速、ライン。1つ連絡するだけでも、これで伝わるかな・・・などと迷い、簡単ではなかった。辞書を引いたり、調べたり、母に聞いたり・・・。ランチをするにあたり何が食べたいか、好き嫌いはあるかなと聞くことはたくさんあるのに、どのメッセージを書くにも時間がかかり大変だった。返信されたものの中でImなどのア

ポストロフィーがなかったり、普通はkind of と書くところをkindaと書かれていたり、生きた英語に触れることができた。そして、当日。少し遅れるとのことで、連絡が来た。外国人はよっぽどのことがないかぎりあやまらないと聞いていたが、その通りでI'm sorry. のかわりに、Thanks for waiting ^^ と書いてあり納得した。また、数分後に着くと連絡が来てから、約30分後に到着した時は、さすがにI'm sorry. と言っていたがたいして悪びれた様子もなかった。習慣の違いを強く感じた。まず会ってみてビックリだったのは、背が低かったことだ。オンラインレッスンをしている時は、背が高く大人っぽく“先生”というイメージだった。が、実際に会ってみると背が低めで、とっても可愛らしい感じで、おしゃべり好きのフレンドリーな人だった。私の思っていた印象とはまるで正反対で、カメラを通して見るのと直接会うのでは相手の姿を見ていることには変わりはないはずなのに、実際にはあまりにも離れすぎていて、ビデオで映していたのは誰だったのだろうかと思うぐらい違って心底驚いた。日本に住んでみての印象を聞いてみた。彼女は、とにかく電車は敵！と言っていた。ややこしい上、どの方向を見ても同じに見えてきて迷うそう。フィリピンでは、電車はなくジプニーが主な移動手段で時刻表もなく、目的地に着く時間もわからないらしい。だから、遅れてもあまり気にしないのだなと理解できた。また、フィリピンでは誰かに話しかけてみたり、興味のある人はジロジロ見てもいいが、日本人は知らない人に話しかけたり、ジロジロ見たりしてはいけなくて、オープンじゃない人種だよねと言っていた。私は逆に、フィリピンの人は明るくあけっぴろげだと思った。

今回の経験を通して、お互いに興味を持つことが理解し合うための第一歩になると学んだ。オンラインレッスンでお互いのことを質問し合って興味を持ち、その興味が会いたいと思う気持ちにつながり、本物の彼女に会って話すことでより深く相手を知ることができた。別れのハグで“彼女”の温もりが伝わってきた。

今の私にできることは、先入観を持たず相手に興味を持ち、自分自身の心で確かめることだと思う。それは国を越えて理解し合うだけでなく“人”同士がわかり合うことにつながっていくのではないだろうか。

## 「協力するためには」

甲府市立南西中学校3年 三藤 愛斗

私は、最近国と国どうしの問題をニュースや、インターネットなどで多くみかけるようになったと思う。この理由として、双方の意見の考え方の違いや、歴史上のことだと言う。もう1つ、日本に増えてきた外国人観光客のことについて。私もよくデパートやスーパーなどで見かけますが、これをどのように使えばいいか分からない、あれはどこにあるのだろうと外国人観光客が増えるにつれこのようなことも多くなってきたのではないかと思う。私はこの2つの問題点の解決策等を考えていきたいと思う。

最初に国と国どうしの問題について考えていきたいと思う。自分の考えは、たがいの意見を尊重し、平和的に問題が解決できればいいが、そんなにうまくはいかないと思うので、この問題はとても難しいと思った。けれど、いつかはこのような難しい問題を平和的に解決できるような、平和な時代が来ればいいと自分は思った。次の問題点は、日本に増えてきた、外国人観光客の問題についてどのような解決策があるのかについて考えていきたいと思う。私の考えは、外国語の看板や、自分達が行きたい場所を検索できるタッチパネルなどを設置してみたらどうだろうと思った。1つ目の外国語の看板は、比較的低コストで設置できるし歩いている人達の目にも、とまりやすい、上のほうに設置すれば、看板をさえぎる障害物も少ないのでいいと思った。次に2つ目のタッチパネルは、自分達の行きたい場所を正確に示してくれ、示してある場所もタッチパネルなので近くでみやすくいいと思った。しかし、1つ目、2つ目の提案には、不便な点もある。まず1つ目の提案は、はなれている場所からは見にくく、仮に近くにいたとしても、目が悪い方、目の不自由な方は、この外国語の看板を設置するという提案は、不便な点が多いと思った。次に2つ目の提案は、お年寄りの方はタッチパネルの操作になれていなかったり、コストも、かなりかかってしまうので、このタッチパネルを設置するという案も、不便な点が多いと思った。やはり、この問題も難しく、まだまだ考えていく必要があると思った。最後に、私がこの作文を書いている中であらためて知ることができたことがたくさんあり、嬉しかった。そして、まだまだたくさん問題があり解決できていないことが思っていた以上に多くびっくりした。これからも自分の生活の中

でこの作文で知ったことや、分かったことを最大限に生かし、生活していきたいと思う。

## 「国際交流の提案」

甲府市立南西中学校3年 田中 和実

「幼い頃から国際交流」をすれば国際理解につながるのではないかと思う。

なぜかという、子供は親や周りの大人から、考えなどを影響されやすいからだ。例えば、親がある国に悪いイメージをもっていたとする。子供は親から影響されて、悪いイメージをもってしまうことが多いと思う。このように、子供は先入観でその国のイメージができてしまう。だから、影響される前の幼い頃から国際交流をして、自分の体験からその国のイメージをつくるのが大切だと思う。幼い頃に交流をすることにより、コミュニケーションを学ぶこともできると思う。

私の学校では去年、甲府市の友好都市である成都市との交流会があった。お互いの中学校の文化を披露し合い、質問コーナーなども行われた。質問コーナーでは、成都市の生徒へ質問した人へ、成都市の生徒から、手作りの刺繍のバッグのプレゼントがあった。一人一人が手渡しするときには会話をして笑顔になり、周りも笑顔になり、とても楽しい時間になった。また、給食も一緒に食べ、クラスの雰囲気もとても和やかになった。成都市の生徒は英語を話すことができるため、英語を使ってコミュニケーションをとった。私は英語が得意ではないので、英語が得意な子に通訳してもらったり、自分達が知っている単語を適当に作ったりして、クラス中が大笑いだった。成都市の生徒も笑ってくれ、給食の片付けが遅くなってしまふほど、皆がたくさんの話をしていた。その他にも私は、たくさんの国の人と交流をしていた経験がある。アメリカ人の女の子、ベトナム人の男の子、マレーシア人の男の子。小学校4年生の時には小学校で甲府市の姉妹都市であるデモイン市との交流会もあった。どれも短い期間・時間での交流だったが、私は気付いたことがある。1つ目は、どの国の子も日本の事を良く思っていることだ。「日本の文化が好き」「日本語に興味を持っている」などの言葉があり、私はとても嬉しく思った。2つ目は、コミュニケーションの大切さだ。アメリカ人はもちろんだが、成都市の生徒やマレーシア人の男の子も英語が話すことができる。国際交流の上で英語は重要なコミュニケーションであることに気付いた。私も英語の勉強をして、自分から積極的にコミュニケーションをとれるように努力していきたいと思う。

現代は、グローバル化が進んでいて、外国人も珍しくなくなっている。しかし、メディアの存在が大きく、テロや公共的マナーが守れないなどのことが、連日報道されている。このようなこともあり、子供もますます影響されるのではないだろうか。しかし、報道されていることは、ごく一部の外国人で、その国全員がそうなっているわけではない。私も経験したように、国際交流は、自分の持っているイメージを変え、とても有意義なものになる。メディアに影響されやすい現代だからこそ、「幼い頃から国際交流」をするべきではないのだろうか。私も、「もう少し幼い頃から国際交流すれば良かったなあ」と思った。これからもいろいろな国の人々と関わっていきたい。今はグローバル化が進んでいるので、国際交流も難しいことではないはずだ。一人一人が国際交流に積極的になっていけば国際理解にもつながっていくと思う。そして、一人一人の国際理解が、今の世界をもっと暮らしやすく、もっと楽しく過ごせることにつながっていくのではないかと思う。

## 「味わい、体験し、分かち合う国際交流」

北杜市立甲陵中学校 1年 池田 康将

ぼくは、以前、歴史の本を読んで「日本に仏教が伝来した時には、仏教賛成派と反対派がいた」ということを知りました。日本に仏教が伝わる前、日本では神道という宗教が信じられていました。仏教が伝わった時には、神道と思想が異なる為、多くの日本人から反感を呼んだそうです。その後、仏教は日本に取り入れられて定着しました。

この出来事では、多くの日本人は神道を尊重しようと仏教を嫌ったのです。つまり、自国の文化を尊重するために他国の文化は取り入れなかったわけです。ぼくは、この考え方は良くないと思います。当然、国々では、宗教や文化、生活と様々な点が違います。またそれらのものには長所と短所があると思います。例えば、キリスト教では、長所はキリスト教を信じればだれでも救われるという親しみやすい宗教です。反対に短所は、一神教のため、その国に異なる考え方の宗教があるとその宗教のお寺などを壊してしまい、他の宗教の信者から反感を呼び、戦いになってしまうこともあるということです。ぼくは、このような長所と短所を理解し、国際交流でその長所を自国の文化に取り入れるということが大切だと思います。互いに長所を学び合って自国の文化に取り入れることで、自国も他国も文化や習慣などの質を高めていけるとと思います。

そして、他国の文化を取り入れ、自国の文化を他国に紹介することで、互いに交流が深まり、今まで仲があまり良くなかった国とも仲直りできたり、仲良くなったりするかもしれません。国と国ではないですが、ぼくも友達の趣味を理解し、友達もぼくの趣味である将棋を理解してくれたことで仲が深まりました。また、互いに相手の趣味を体験してみて、楽しむことで、「この遊びには、こんな面白さがあるんだ」と気付くことができました。ぼくは、これは国同士でも同じだと思っていて、他国の文化や習慣を理解して、それを味わい、体験し、分かち合うことで、「国際の輪」というものがより広がるとと思います。

さらに、この「国際の輪」がもっともっと広がれば、国々で協力し、世界の困難な問題も乗り越えられると思います。例えば、今、重大な問題になっている「地球温暖化」も国々で協力し、電力の消費の削減やハイブリット車の普及を進めることで、地球をきれいにし、多くの生き物が共存する社会を築くこと

ができると思います。

このように、「国際交流で互いの国のことを理解する」ことはとても大切なことなのです。そう気付いたこの時、ぼくはやりたいことがあります。

それは、オーストラリアの文化を学ぶということです。ぼくの通っている学校、甲陵中学校は3年生になると6日間の語学研修に行きます。それは、外国の文化を学ぶ、貴重な機会なので、英語の学習を深めるのと同時に、オーストラリアの文化も学びたいと思います。そして、日本に帰国したら、家族にその文化を話して、よくオーストラリアの文化を理解したいと思います。また、良いと思った点は日々の生活で活用したいと思います。

## 「違いから生まれる偏見」

北杜市立甲陵中学校3年 尾崎 永奈

皆さんは、誰かに偏見を持っていますか。いない、と答える人が多いと思います。ですが、本当にそうかも一度考えて頂きたいです。みなさんの考え方は間違っているかもしれません。私の考え方は間違っていました。

私はこの夏、約3週間ニュージーランドに行き、ホームステイをしてきました。ホームステイしながら平日は近くの学校に通いました。私があちらの学校に通って知ったこと、学んだことが2つあります。

まず1つ目は「国の文化の違い」です。私が通ったのはタウランガ・ガールズ・カレッジという大きな高校でした。その学校はとても国際色豊かで日本人や韓国人、中国人、台湾人、スウェーデン人、インド人など世界各国から多くの留学生が通っていました。私はその人たちと話す機会が何度かあったのですが、そのたびに「国の文化の違い」を感じていました。話しても声が小さく控えめで話が長く続かなかった人。口調が強めで話を押し通し、私の意見を聞き入れようとしてくれなかった人。私はそのような人と話すと、あの国の人とは話しにくいな、あの国の人はいやだなと思ってしまいました。特定の国の人達を一人の印象で決めつけて、敬遠していたように思います。しかし、それも人の個性であり私が理解すべきものなのだと思えばホストファミリーと過ごす間に気づきました。日本人は控えめで遠慮することが美しいと考えていますが、ニュージーランド人は相手に自分の意見を伝えることが大切と考えています。あいまいに答えると、相手には失礼だと思われることがあります。どの国にもその国特有の文化があります。だから、他の国の人と話すときにはその国の文化を理解し、かつ自分の国の文化を理解してもらう必要があることに気が付きました。

2つ目は、「人種の違い」です。よくオーストラリアやニュージーランドでは有色人種への差別があると耳にします。インターネットで「ニュージーランド人種差別」と検索したことがあります。すると、差別についての体験や意見がのっているサイトが複数でてきました。そうして日本出国前、差別があるとの噂を聞いた私はニュージーランドへ行って、差別を受けないか心配でした。ニュージーランドに行って気づいたのですが、「差別」という言葉はニュージーランドにはないようです。私とスクールバディで話していると、周りに同じクラ

スの子がやってきて、いろいろなことを聞いたり、話したりしてくれるのでした。普通のことのように聞こえますが、とてもうれしかったです。中には、日本が好き、日本に行ってみたくてくれた友達もいました。ニュージーランドには日本を好きな人がたくさんいるようでした。また、ニュージーランドにはさまざまな人種の人々が住んでいます。ニュージーランド人といっても、インド生まれニュージーランド育ちだったり、イギリスと日本のハーフだったり様々でした。ですから、人種や肌の色で嫌がったり差別したりなんてことは全くありませんでした。一緒にニュージーランドの学校に通った、日本人の友達も「人種の違い」がないことに驚いたらしく、素敵なお国だねと言っていました。本当に素晴らしい国だと思いました。

3週間のホームステイで学んだことは、常に心の窓は全開にしておき、何でも吸収するぞという強い意志が国際交流において大切だということでした。ちょっと「違う」からと言って自ら相手を理解することを拒絶したのでは、外国を訪れる意味がありません。どんなことにでも、何も知らないままテレビやインターネットの情報に惑わされて、偏見を持つことはよくないと思います。百聞は一見に如かずということわざがあるように、その国のことはその国に行ってみなければわかりません。実際に体験しなければわかりません。私は、ニュージーランドの人たち、世界各国の人たちに偏見を持っていたようです。あなたはどうですか。外国の人と友達になりたい。他の国について知りたい。ホームステイしてみたい。留学したい。そう思っている、インターネットやテレビなんていう小さいことを信じていては、それらは有意義なものにはならない、又は実現することすらできないでしょう。

相手を理解することは決して難しいことではありませんでした。

## 「ずっと続く国際交流」

北杜市立甲陵中学校3年 中川 立土

国際結婚というものを、あなたは深く考えたことがあるだろうか。また、国際結婚という選択肢があなたにはあるだろうか。

僕がこの国際結婚というものを知ったのは小学1年生の冬だった。父の姉が結婚すると聞いたのが切っ掛けだった。その時は、ただ単にそのような結婚もあるのかなと思った。姉はヴァイオリンを本格的にやろうとドイツに留学した。そこでフランクという方に出会い、交際を得て国際結婚という選択肢にありついた。その結婚式に父と一緒にいき感動した。出身国、習慣、宗教、言語が全く異なるのに結婚という答えになった。これは衝撃的であり興味を持った。また、日本と同じ結婚式というのに長閑なブドウ畑でのんびりあげるところからも文化の違いを感じることができた。

姉は現在でもドイツ郊外の町でヴァイオリン教室をしながら住んでいる。3年前には男の子が生まれた。その時もドイツに行き新しいとこと触れ合った。日本人だけの血ではなくドイツの血もあるのでとても可愛かった。また、母は日本で、父はドイツ語で会話してくれるため日々2カ国語を話せるようになる羨ましい環境だ。もちろん姉もドイツ語はマスターしている。日本に夫婦で来たときにはフランクさんと英語で会話したりドイツで人気のボードゲームをしたりなどちょっとした国際交流を楽しんだ。

またさらに国際結婚というものに強く興味を持った切っ掛けはテレビだった。最近日本の文化の魅力を外国人が語ったり、日本の商品、技術を海外で使ってみるといった番組が増えている。どれも2020年の東京オリンピックに向け日本の魅力を海外にアピールしている。そんな中、外国で活躍する日本人妻に密着し、その国の文化や生活スタイルについて紹介する番組だった。日本の文化の違いを比べたり、困っている部分や料理についていろいろなことを日本人妻目線で紹介している。また国際結婚というものに両親から許可をもらうといったシーンは再現ドラマになっている。しかし、国際結婚をして生活するとなると両親は心配し、簡単に許可をもらえるといったことは少ないそうです。

またNHKの朝ドラ「マッサン」で国際結婚が改めて注目された。しかし現在では国際結婚は右肩下がりと聞いたことがあり、少し寂しい現実だと感じた。

以前、学校の活動班5人に国際結婚ってどう思うかと質問してみた。今の僕たちには早すぎるかなと思う部分もあったが少なくとも出会って交際をするという可能性も考えられるからだった。全員国際結婚は文化、習慣、言語が違うため大変そうという答えだった。

確かに父の姉に聞いたところとても大変で毎日疲れるがとても充実した日々が楽しいと言っていた。

僕の夢はドイツに留学し日本人には発音が難しいといわれているドイツ語をマスターするという事だ。もちろん英語もマスターし、日本語を含めた3か国語を使いこなし、それにともなって日本企業と他国企業の間にいる人だったり、通訳として世界で活躍する人になりたい。留学をするにあたり海外で交際し、国際結婚という答えになったとしても普通の結婚というものに何も変わらない。文化、習慣とかいったものはその後についてくるものだと思う。

グローバル化や情報化が進んできた現代では簡単にコミュニケーションがとれるがそれを国際交流と言ってしまってよいのだろうか。実際に出会い、握手やハグといった海外でする一種のコミュニケーションから会話に発展したものが国際交流ではないだろうか。そんな中、意気投合し、交際をして、結婚という答えになり国際結婚。文化面、習慣面、言語だったり乗り越えなければいけない壁もあると思うがそのすべてが国際交流ではないだろうか。国際結婚こそ一番長い国際交流であり、ずっと、いや一生の思い出となるだろう。

## 「将棋から始まる国際交流」

甲府市立北東中学校3年 堀内 晶貴

私は、今年の夏に甲府市の姉妹都市友好教育研修派遣団の一員として、アメリカ合衆国アイオワ州デモイン市に行った。この研修においての私の目的は、英語で将棋を教え対局することによって、国際交流を図ろうというものだった。

何故将棋かというと、ただ単に多言語の環境において、その言語を使ってみるだけでなく、自分の個性や得意分野を活かした方法で国際交流に挑戦してみたかったのだ。そして将棋は、私自身が小さいころから親しみ、魅力的な日本文化だったからだ。また近年若い世代の棋士の登場で世界的にも将棋が注目されていることも併せて、是非自分の手で将棋の楽しさを伝えたいと考えたのである。

事前に将棋の歴史や特徴、駒の種類、動きを英語でスムーズにわかりやすく説明するために、家族に付き合ってもらい何度も練習を重ねた。英語でぶつぶつとつぶやきながら、一人将棋も何回も打った。特に苦労したのは、駒が「成る」というルールの説明だ。「成る」は出世する、いわゆるプロモートという単語を使うことにした。

そして、愛用の将棋盤と駒を携えてデモイン市での生活がはじまった。いよいよホストファミリーの13歳の少年、ヘンリーに将棋を教える時が来たのだが、練習通りにはいかず、説明に時間がかかってしまった。気候の涼しいデモインだったが、緊張と焦りから私の背中には汗が流れていた。練習の時点で想定していた、相手からの反応は得られず、実際に英語で教えることの難しさに直面した。それでもチェスの駒の動きを参考にしながら自分の持っている英語の知識を駆使し、ひるまずに一生懸命に説明をした。そしてヘンリーも、辛抱強く集中して私の説明を聞いてくれた。そのおかげで、どうにか対局までにこぎつけ、ほっとした。当然私が優位の戦いが続いたが、4、5回対局をすると、私の主要な駒がヘンリーに捕られることが多くなり、苦しい手を強いられるほど、追いつめられる局面もあった。このことはヘンリーが将棋を深く理解し始めているということである。そしてうれしいことに、翌日にはヘンリーから「将棋をやろう」と誘われ、さらにヘンリーは、私の助言を受けながら、いとこのジュリアンにも将棋を教えることができるようになった。3人で何度も対局を

し、粘り強く考えて相手の動きを洞察するという将棋の醍醐味を味わった。将棋を通じて交流の輪が広がり、異文化の伝達とその素晴らしさの共有が果たされたのである。今やインターネット上に国境はなく、オンラインで世界中の誰かと簡単につながり、将棋の対戦ゲームも楽しめ、情報や文化の共有が瞬時にしてかなう便利な時代だ。しかし今回、日付変更線を越え、12時間の道のりを経て、自分の足で初めて訪れた国で出会う友人に、英語で将棋を伝授する目標を達成できたことは、自らの計画と実行の結果であり、大きな自信と喜びとなった。ヘンリーの自宅、リビングで私たち3人は将棋盤を囲み静かな午後の時間を過ごした。アメリカ建築の吹き抜け天井のリビングにパチッパチッと駒を指す音が響いていた。

アメリカではチェス、日本では将棋。ともに古くから伝わる知恵による攻略戦である。相手を見つめ心を読み、打つ手を決めるといふ、静かだが力強いこの文化は、私たちの心を一つにしたのだ。私はヘンリーやジュリアンに対して親近感が増し、絆が繋がったことを感じた。彼らも私と同じように感じてくれていると確信もした。そしてホームステイ最後の夜の1局は、上達したヘンリーと私の接戦となり、10年の将棋キャリアの中で最も印象深く忘れられないものとなった。

私の目的の達成は、将棋自体の素晴らしさはもちろんだが、先ほど述べたように、私の事前の入念な準備や練習の成果もあってのことである。そしてそこに「伝えたい」という私の強い気持ちと、その私の気持ちを汲み、積極的に理解する姿勢でいてくれたヘンリーの優しさがあったからこそ成就したのだ。

今回の将棋を通じての交流から実感したことは、自分の得意分野を活かした国際交流により、さらに親密にお互いを知ることができたことと、異文化理解とは、多言語を習得する以前に、相手の立場を理解し尊重し思い図ることが基本であるということだ。このことは、将来についても考える良い機会となった。

私の得意分野はまだ定かではないが、高校、大学と学びを進めていくうえで、探していくつもりだ。いずれは習得した確かな技術や高い知識を携えて様々な国で活躍していき、国際社会の役に立ちたい。そしてどこにいても、誰に対しても、ヘンリーが私にしてくれたような思いやりのある態度で接し、積極的に理解し協力し合う関係を築いていきたい。

14歳の夏、将棋を通じてのヘンリー達との出来事により、私は国際人への小さな一歩を踏み出した。

